

第2章

覇権政党の後退と対抗

——マレーシア選挙政治をめぐる論点整理と予備的考察——

鷺田任邦

要旨：

マハティール退任後のマレーシアの選挙政治は、与党連合・国民戦線（BN）の急激な後退によって特徴付けられる。2008年選挙でBNは大幅に議席を減らし、続く2013年選挙には野党連合に得票数で劣ることになった。覇権政党の典型とされたBNは、なぜ急激に後退したのか。また、後退に直面したBNはどのような政権維持戦略をとり、それによって選挙政治はいかに展開しているか。体系的な検証は次年度の最終報告に回し、初年度にあたる本中間報告では、BN衰退をめぐる既存研究をレビューし、予備的な考察を行う。

キーワード：

覇権政党の急激な後退、区割り変更の逆説的効果、2次元空間とライカー的攻勢

はじめに

1970年以来、与党連合・国民戦線（Barisan Nasional: BN、旧連盟党）が安定多数議席（下院議席の3分の2）を維持したマレーシア（旧マラヤ）は、覇権政党が支配する権威主義体制の典型例とされてきた（Magaloni 2006; Greene 2007; Magaloni and Kricheli 2010; 鷺田 2012等）¹。しかし、マハティール退任後、BNは急激に後退した。後任のアブドゥラ政権下、BNは2004年選挙に危なげなく勝利したが、2008年選挙では一転して議席を3割近く減らし、初めて安定多数を失った²。BNが議席を減らすことは選挙前から想定されていたが、実際の減少幅は、多くの与野党関係者・有権者・ジャーナリスト・研究者等の予想をはるかに上回るものであり、「政治的津波」と称された。

2008年選挙を契機に、マレーシア政治は大きく変化した。それまで困難と思われてきた

¹ マレーシア（旧マラヤ）では、マレー系政党・統一マレー国民組織（United Malays National Organization: UMNO）率いる与党連合が、1957年の独立期から政権を担い続けている。独立前に結成された与党連合・連盟党は、1969年選挙で（過半数を維持したものの）安定多数を失い、暴動に伴う一時的な議会停止・権威主義的法改正を経て、1970年代はじめにBNに再編された。マレーシアは多民族国家であり、マレー人（と島嶼部原住民）を含むブミプトラ（土地の子、67%）、華人25%、インド人7%からなり（2010年値）、政党の多くは特定の民族を基盤としている。連邦制をとるマレーシアは、地理的には半島部（11州と首都等）と島嶼部2州（サバ州・サラワク州）によって構成され、両地域は民族・政党の構成等の面で異なる。

² 安定多数は憲法改正の要件であり、政権党が単独で憲法改正能力を確保していることは、覇権政党体制の特質のひとつである（Magaloni 2006）。頻繁かつ恣意的な憲法改正は、BNにとって有用な手段であった。

政権交代の機運が高まるとともに³、選挙改革を目指すブルシ（Bersih）をはじめとする社会運動がさらなる盛り上がりを見せた。選挙時の選挙協力をもとに選挙後に結成された、非公式な野党連合・人民連盟（Pakatan Rakyat: PR）は、実質的な二大政党制を構成すべく、協力関係を維持した⁴。2009年にアブドゥラを引き継いだナジブ政権下で実施された2013年選挙では、PRの得票率がBNを上回り、BN後退が一時的なものではないことが明確になった⁵。現在BNは、過大代表によって過半数弱の得票を6割程の議席に膨らませることで、政権を維持している⁶。

では、覇権政党の典型例とされたBNの急激な後退と停滞を、いかに理解すればよいのだろうか。結論から述べると、急激性・意外性の解明が鍵となる2008年については、①得票減少の要因としての有権者（特に華人）の評価枠組みの変容と、②得票減少をより大きな議席減少へと拡張する要因としての選挙制度上の効果（特に区割り変更の逆説的效果）という二段構えで、検討を進める必要がある。

一方、2013年選挙の検討においては、後退後のBN側の対応を考慮に入れる必要がある。支持回復が困難であるという現実直面したBNは、選挙が近づくにつれ支持回復よりも支持基盤（地方マレー票）の固守へと戦略的重点を移して生き残りを図った（Kessler 2013）⁷。意外性に特徴付けられる2008年選挙とは異なり、2013年選挙は、ある程度BNの試行錯誤と選択の結果であったといえる。ただし、BNの左右できた余地を過大視すべきではなく、苦戦の継続性（支持回復の困難さ）を理解するためには、やはり2008年での後退との連続性のなかでとらえる必要がある。BNの後退と抵抗を包括的に理解することは、覇権政党の盛衰やそれが民主化に与える影響を比較政治学的に検討する上でも有益である⁸。

³ Magaloni (2006) は、政権党が高い議席占有率を確保し、打倒困難であるというイメージを構築することが、有権者や議員の離反を防ぐ上で重要であると論じている。2013年選挙が近づくにつれ、「今回で!」、「チェンジ!」、「UMNO 以外!」といったスローガンが掲げられた。8割を超える過去最高の投票率は、有権者の関心の高さを物語っている。

⁴ PR は、中道多民族（主にマレー系）政党・人民公正党（Parti Keadilan Rakyat: PKR）を軸に、マレー系政党・汎マレーシア・イスラム党（Parti Islam Se-Malaysia: PAS）、非マレー（主に華人）系政党・民主行動党（Democratic Action Party: DAP）によって構成されている。1999年選挙に結成され、2004年にDAPが離脱して解消された代替連合（Barisan Alternatif）を起源としている。2015年にDAPとPASの対立を契機に解消され、現在はPKRとDAP、そしてPAS離党者が結成した国民信任党（Parti Amanah Negara: PAN）による希望連盟（Pakatan Harapan: PH）に再編されている。単一の政党として登録されている与党連合と異なり、野党連合は非公式な連携である。BNが統制する結社登録局が、野党連合の登録申請を却下したためである（共通ロゴの使用も認められていない）。

⁵ BNの議席数は選挙ごとに増減を繰り返す傾向にあり、連続して議席を減らしたのは、2013年を除く過去12回中1回のみ（UMNOの分裂騒動後に実施された1990年選挙）であった（金子2013; Lee and Thock 2014）。支持増減の振り子の要因として、華人有権者の balan-sar としての役割が指摘されている。

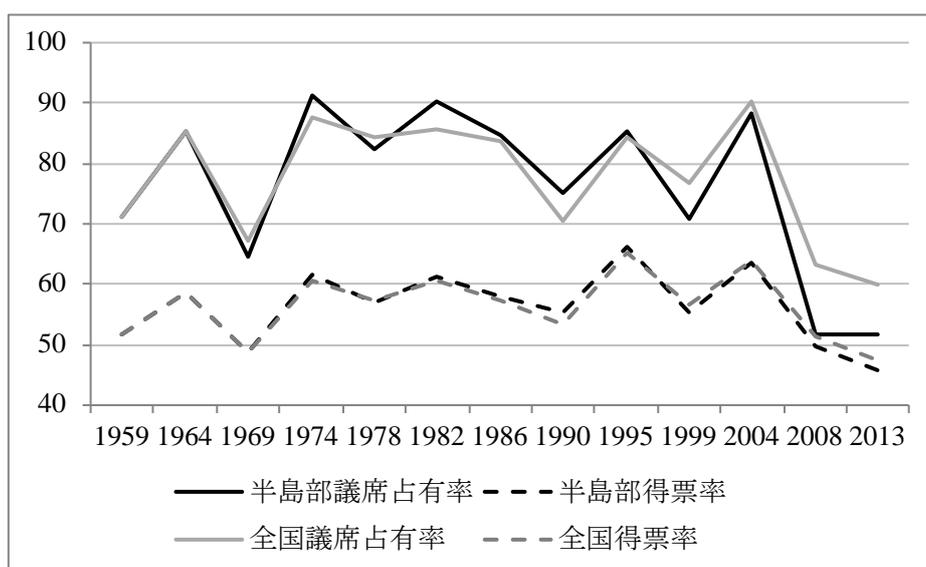
⁶ Lee (2013; 2015)、Ostwald (2013)、SUARAM (2013) 等を参照のこと。過大代表（一票の格差）は、今に始まったことではないが、2013年選挙でBNが得票率でPRを下回ったため、関心が高まっている。

⁷ 明確な戦略シフトは2013年選挙後に現れる（Case 2013; Kessler 2013; 伊賀 2014; 中村 2015a）。なお、2013年の選挙結果を受けて、ナジブは「華人の津波」という言葉を用いた。部分的には妥当だが、BN停滞の責任を華人に転嫁するレトリックとしての側面が強く、BNの戦略転換の文脈に位置づけることができる。

⁸ 2008年選挙を機に選挙の競争性が増し、BNが安定多数を失ったことから、民主化の進展と解釈する向きもあった。たとえば、民主主義指標の代表例である Polity IV（-10から+10の21段階尺度）は、2007年の3から2008年の6へと評価を改めた。競争的複数政党間選挙の経験（Lindberg ed. 2009）や、野党連合の成立（Howard and Rossler 2006）は、民主化につながるといわれているが（cf. Wahman 2011; 2013）、近年の権

本論に入る前に、選挙結果の推移を確認しておきたい。図1にあるように、2004年選挙において、BNは過去最高の議席占有率（9割超）を記録したが、続く2008年選挙で、得票率12%ポイント減、議席占有率27%ポイント減という過去最大の下げ幅を記録した。特に、半島部での後退が著しく、BNは14%ポイントの得票減と37%ポイントの議席減に見舞われた⁹。下院選と同時に行われる州議会選挙で、過去最多の5州で野党が州政権を握ったという意味でも、未曾有の後退であった¹⁰。

図1. 与党連合の議席占有率と得票率：半島部と全国



注：得票率は無風区除く。1969年選挙は、半島部のみの結果に基づく。
 得票率を過小評価すると考えられる無投票与党区は、1974年を除いて1割に満たない（半島部では1969年と1974年を除き5%未満）。1974年は旧野党吸収に伴い約3割が該当。
 出典：選挙管理委員会より作成。

各種世論調査・報道や既存研究では、2008年選挙におけるBNからの離反は、主に半島部の非マレー人を中心としている点について、概ね合意が得られている¹¹。政党別結果を示した図2からは、2008年選挙において、半島部に拠点を置く非マレー（華人・インド人）系政党の後退が著しいことがわかる。特に、マレーシア華人協会（Malaysia Chinese Association: MCA）と（同じく華人系の）マレーシア人民運動（Gerakan Rakyat Malaysia: GRM）や、マ

威主義的逆行や民族間緊張の高まりは、BN後退が必ずしも民主化進展を意味しないことを示唆している。

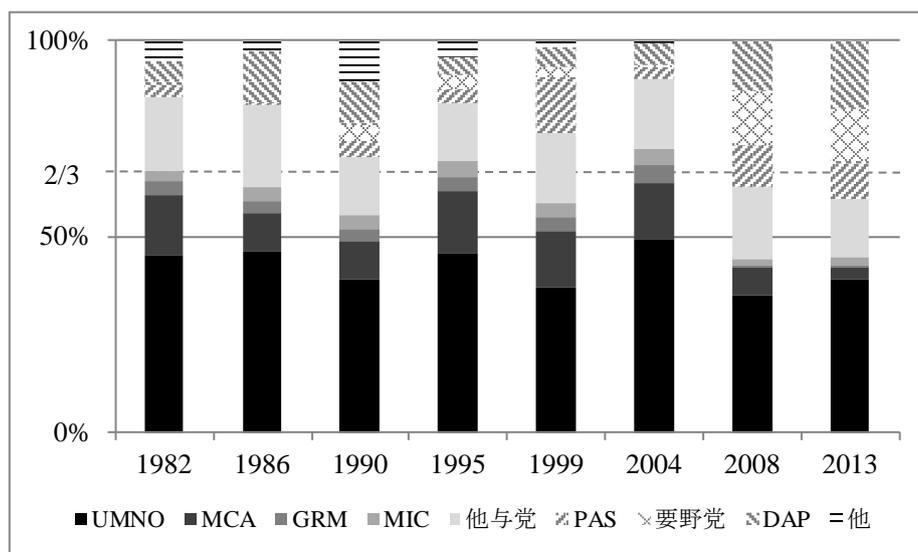
⁹ BNの後退が半島部を中心としている点、島嶼部政党が与党連合に残り続けるかどうかは、半島部でBNが過半数議席を押さえているかどうか依存する点で、本稿は半島部を中心に議論を進める。

¹⁰ BNは、2009年の野党議員の離党を契機にペラ州を奪回し、2013年選挙でクダ州を奪回した。なお、マレーシアでは、サラワク州を除き、下院議会選挙と半島部州議会選挙を同時に行っている（サバ州で同時に実施されるようになるのは1999年以降）。島嶼部で下院直接選挙が実施されるようになったのは、1969年選挙（実際には翌年に延期）以降である。選挙結果の推移は、鷲田（2008）等も参照のこと。

¹¹ 2008年選挙についての研究としては、たとえば、Brown（2008）、Kee（2008）、中村（2008）、Ong（2008）、Ooi et al. eds.（2008）、Tan and Lee eds.（2008）、山本編（2008）、Pepinsky（2009）、Bilveer（2009）等。その他の研究についても、具体的な論点と絡めて後ほど検討する。

レーシア・インド人会議（Malaysian Indian Congress: MIC）が大きく議席を減らした（それぞれ、16 議席、8 議席、6 議席の減少）一方、華人系野党DAPが 16 議席伸ばした。UMNO も 31 議席減らしたが、ひとつの民族が大多数を占めていない民族混合区において、非マレー系の支持が失われた影響が大きいといわれている¹²。

図 2. マハティール政権以降の選挙後の政党別議席内訳



注：要野党はそれぞれ、1990～1995年は46年精神党、1999～2004年は公正党、2008～2013年はPKR。他はその他の野党と無所属。

出典：選挙管理委員会より作成。

2013 年選挙でBNはさらに後退し、得票数でPRを下回った¹³。特に華人系野党DAPが、これまでBNの基盤だった南部や島嶼部サラワク州なども含めて躍進した。2013 年選挙に関しては、BNが地方マレー票を維持（部分的に奪回）した一方、華人票（や都市部有権者）の離反を食い止められなかったという点について、概ね合意がある¹⁴。UMNOが 11 議席伸ばす一方で、PASが 2 議席減らし（PKRは 4 議席増）、MCAが 8 議席減らした一方で（GRMも 1 議席減）、DAPが 9 議席伸ばしたことから、民族的分極化傾向の進展がみてとれる。

以下、第 2 節では、2008 年選挙と 2013 年選挙それぞれに関する既存研究を、（必ずしも網羅的ではないが）レビューし、論点を整理する。第 3 節では課題を整理し、次年度の最終報告に向けた方針について検討する。

¹² UMNO 候補者に対する MCA 支持者票、MCA 候補に対する UMNO 支持者票のように、民族政党間協力関係を背景として、他民族の連携政党の候補者に対して、相互に民族横断的投票がなされることを、票の共有と呼ぶ。詳しくは、中村 2015b を参照のこと。

¹³ 解散前と比べ 2 議席減少。前回選挙と比べ 7 議席減少（補選での敗北や BN 離脱による）。

¹⁴ 2013 年選挙についての研究としては、Chin (2013) 巻頭の特集号、Khoo and Nakamura eds. (2013)、Moten (2013)、中村 (2013)、Noh (2013)、Ufen (2013) 巻頭の特集号、山本編 (2013)、Weiss (2013)、Welsh (2013)、Saravanamuttu et al. eds. (2015) 等。その他の研究を含め、具体的な論点は次節でレビューする。

第1節 既存研究のレビュー

1. 2008年選挙をめぐる議論

2008年選挙に関して、多くの研究が蓄積されてきたが、論点は大きく3つに分けることができる。すなわち、BN後退の要因を、与党の失策、野党の戦略、社会の変化に求める議論である。もちろん、既存研究はどれか一つに絞って議論しているわけではなく、複数の要因を列挙したり（部分的に重複）、複合性を強調する場合がある。

(1) 与党の失策

与党側の失策として頻繁に指摘される点としてはまず、高いインフレ率や経済成長の鈍化といった景気動向の悪化である。これらは、選挙前の世論調査においても重要な 이슈とみなされていた。しかし、以前と比べてとりわけ悪かったという証拠はなく、BNの急激な後退を説明する上では不十分である（中村 2011; Pepinsky 2009）¹⁵。経済問題以外にも、汚職や治安悪化への不満、大規模デモに対する抑圧、首相のリーダーシップ不足と公約未達成、UMNO内部の派閥争いやボイコットなどが指摘されている（Chin and Wong 2009; Moten 2009; Ufen 2008; Pandian 2010）。これらの短期的要因は無視できないにせよ、なぜこうした短期的要因が不均一かつ急激な離反として現れたのかを検討する必要がある。

与党の失策を、民族間関係と関連づける観点からは、マレー人優遇政策や社会経済問題に対する非マレー人の不満の高まり（Brown 2008; 金子 2008; Moten 2009）¹⁶、野党側のマレー人優遇政策廃止公約、UMNO内の非マレー人を刺激する急進的言動（鈴木 2008; Ufen 2008; Chin and Wong 2009; Bilveer 2009）、UMNOの急進化に対し非マレー系BN政党が自民族の利益を保護することができないことへの怒り（篠崎 2008）、あるいは、自立性の低い首相のもとでの民族間協調メカニズムの限界（鷲田 2015）などが挙げられる。ただし、UMNOの一部に過激な言動があったにしても、BNの立場自体が急激に変化したとまでは言い難く、非マレー人の不満が離反につながるメカニズムについて、検討する余地が残る。

(2) 野党の戦略

投票行動を説明する上では、野党側の変化や戦略も無視することはできない。2008年選挙では、中道・民族協調路線のPKRを軸に、マレー系野党PAS、華人系野党DAP間で選挙協力が行われた（選挙後にPRを結成）。選挙戦において、急進派の言動が目立つUMNOに代わってPKRが中道連合を提示したことが奏功し、多くのリベラルな有権者の支持を集め

¹⁵ 資源配分の集票効果は所得水準の上昇に応じて逡減する傾向があるが（鷲田 2012）、急激な後退には当てはまらない。鷲田（2012）の推計に基づく得票率の推計値と実値の比較（Washida 2014）によれば、2008年の得票率は、所得水準・景気・支出規模等からみて順当な得票水準に戻っただけであり、むしろ1995年から2004年の選挙において、BNは推計値よりも高い超過票を得ていた。おそらく、非マレー系の支持が、超過部分を支えていたと考えられる。

¹⁶ インド人の改宗問題など、他にも民族感情を逆なでするような事件が起きていた。

る要因となったといわれる (Ooi et al. 2008; 鈴木 2008; Weiss 2008; Moten 2009)。また、PAS の穏健化 (塩崎 2008; Moten 2009; Ufen 2009) は、非マレー票を呼びこむ上で一定の役割を果たしたと考えられる。ただし、2008 年に野党勢力に求心力が生まれた要因は、野党側の戦略だけでなく、社会の変化を抜きに語ることはできない。また、1990 年選挙以降展開してきた野党連合の試みをめぐる経験が、野党勢力が協力の必要性を学習する上でいかに寄与したかといった野党側の戦略についても、検討の余地がある。

(3) 社会の変化

社会の変化として頻繁に言及される要因は、インターネットなどの情報技術の革新・普及に伴う情報環境の変化である (伊賀 2008; Chin and Wong 2009; 中村 2009b; 2011; 2015; Moten 2009; Ufen 2009)。UMNO 党大会での差別的発言の映像や、デモを鎮圧する映像がインターネット上で拡散したことは、BN の失策の影響を拡大したと考えられる。また、情報環境の変化は、BN 優位の源泉であったメディアの独占と歪曲 (Fong and Md Sidin 2014 等) の影響を削いだという意味でも看過できない。とはいえ、効果に対しては異論もあり (Liow 2012)、潜在的野党支持者が積極的に代替の情報源を求める内生性など、選挙結果への影響を解釈する上では注意が必要である。

インターネットの拡大が、対立軸の変化と相俟って効果を発揮するという立場もある。中村 (2011; 2015) は、アブドゥラ政権下で言論統制の箍が緩み¹⁷、民族横断的イシュー (政治的左右) が出現したことが、BN 後退の要因であると述べている。すなわち、BN はそれまで、意図的に民族イシューを顕在化させることで、民族横断的次元が顕在化することを防ぎ、票の共有効果が得られる混合区で高い議席シェアを占めてきたが、インターネットによって民族イシューに縛られない投票行動が生まれたことで、共有効果が失われたという論理である。BN と野党勢力の中道をめぐる争いといった、イシュー次元を単一的にとらえる先述の見方と違い、2つの空間のなかで投票行動の変化を理解するという視点は、野党協力が求心力を持ちえた背景やBNの急激な後退を理解する上で重要である。ただし、民族横断的なイシュー次元の具体的な内実や、民族間の認識枠組みの違い、インターネットの効果等については、検討の余地が残る。2次元空間ととらえる視点は、2008年選挙から2013年選挙の流れを理解する上でも有用であるので、改めて後述する。

一方、有権者の世代交代の影響も指摘されている (鳥居 2008)。民族的イシューに縛られない層が増加したという意味では、上述のイシュー空間上の選考分布とも関連している¹⁸。野党支持者やインターネットの利用者に若年層が多いということからみても、世代交代が影響している可能性がある。世代交代や都市化のなかで拡大した無党派層が、アブドゥラ政権に期待し、結局落胆したことで、議席が乱高下したのかもしれない。いずれにせよ、

¹⁷ 批判に対するアブドゥラ政権の寛容な態度が、非マレー人のBNに対する異議申し立てをやりやすくし、野党に投票する抵抗感を減じたという点もしばしば指摘される (中村 2009; Pepinsky 2009 等)。

¹⁸ 2008年選挙では、民族横断的投票が以前よりも顕著になったと指摘されている (Ooi et al. 2008; Tan and Lee eds. 2008)。

さまざまな要素やその相互関係も考慮に入れ、体系的に検討する必要がある。

2. 2013年選挙の特質と背景をめぐる議論

2013年選挙に関しても、研究蓄積が進められている。2013年選挙では、BNが地方マレー票を維持した一方、華人（や都市部中間層）のBN支持が下げ止まらなかったという解釈については概ね合意があるものの、その背景については、必ずしも合意は得られていない。たとえば、地域的要因（都市部・地方）と民族的要因のどちらが重要か¹⁹（あるいは両者間のような相互作用があったか）という論争（Ng et al. 2015a; 2015b; Pepinsky 2015）も含め、さらなる検討の余地がある。以下では、先ほどと同様、与党・野党・社会という3つの観点から、論点を整理する。

(1) BNの苦戦／善戦

急激な後退というわかりやすい構図を持つ2008年選挙と異なり、2013年選挙の結果については評価が分かれており、評価の仕方によって着目する側面が異なる。BNが支持を回復できずに得票数で野党連合を下回ったという点を重視する立場からすれば、BNの失策に焦点が当てられる（Choong 2013; Ufen 2013; Noor 2013）。2008年選挙の大敗を受けてアブドゥラを引き継いだナジブは、民族融和路線（ワン・マレーシア）を掲げて融和策を展開し、治安維持法の撤廃（代替立法で部分的に担保）等の改革を進めたが、支持回復にはつながらなかった。むしろ、UMNOがマレー人特権を擁護する極右団体プルカサ（Perkasa）を放置・擁護し、協力関係を持ったことで、華人のさらなる離反を招いた。選挙改革を求める社会運動の要求に対しても、議会特別委員会の設置などの譲歩を行ったが、改革が中途半端であるという評価が大勢を占め、デモの抑圧等の一貫性に欠ける対応は批判を招いた²⁰。

一方、BN（特にBN内でプレゼンスを増したUMNO）が、支持回復よりも支持基盤（マレー票）の固守路線に切り替えたととらえると（Kessler 2013; Hamayotsu 2013; Mohamad Nawab 2014）、異なる解釈もできる。BNがマレー人優遇・権威主義的逆行へと明確に舵を切るのは、2013年選挙後であるが（Case 2013; 伊賀 2014; 中村 2015a）、支持回復が困難であることが明らかになるなかで、BNは選挙前から戦略的重心を移していった。選挙が近づくとつれ、華人票を多少犠牲にしても、民族主義的感情（特権喪失の恐怖）を煽ることでマレー票を固める「穏健なプルカサ（Kessler 2013）」路線のキャンペーンが展開された。こうした観点からすれば、UMNO議席の9増（半島部8増）とPASの2減、MCAの8減とDAPの10増（半島部5増）という対照的な結果は、BNの想定内もしくはUMNOにと

¹⁹ 本来は相対的な問題であるが、ときにゼロサム的な表現がなされる背景には、党派的な思惑もある。つまり、華人に責任を転嫁したいUMNOは「華人の津波」として民族的側面を強調し、華人を超えて広範な支持を築きたいPRは、（過大代表を批判する意味でも）「都市部と地方の分断」を強調しがちである。

²⁰ その他、2008年選挙と同様、生活コストの上昇や散発する汚職・スキャンダルなどに対しても、有権者は不満を持っていたことが、各種世論調査で示されている（ただし、経済指標は前回よりも良好）。加えて、MCA等の非マレー系政党の内部対立が、後退後の回復を妨げたという指摘もある（Lee and Tock 2014）。

つての善戦ととらえることもできる。2008年選挙に続き、半島部で過半数を僅差で維持した点も成果といえる。

(2) 野党の躍進／伸び悩み

野党側に着目した場合も、評価によって力点が異なる。PRが得票数でBNを上回った（特にDAPが躍進した）点を評価する観点からは、PRの成熟が指摘できる。政権交代の機運の高まりを背景として、二大政党的競争関係が維持され、民族対等路線（Welsh 2013）や既得権の打破（鈴木 2013）といったBNに代わる代替的ビジョンを提示したことは、PRの善戦に寄与したといえる。また、2008年選挙以降、特に経済規模の大きいスランゴール州やペナン州における州政権を共同運営することで、政権担当能力を示すアピールする機会を得たことは、PR内対立や汚職の露呈などのデメリットを上回るメリットがあっただろう。協力関係を背景とする民族横断的投票への抵抗感の緩和は、PRに一層の票の共有効果をもたらした（Lee and Thock 2013; 篠崎 2013; Oh 2014）。

一方、政権交代が実現しなかった点を重視する立場からすれば、地方の過大代表などの、これまでBN体制を支えてきた政権インフラが重視される。たとえば、与野党間の資源の非対称性としては²¹、低所得者層へのばら撒きとしての国民福祉政策（Bantuan Rakyat 1 Malaysia People's Aid: BR1M）の展開や、さまざまな選挙区での資源配分の活用（Weiss ed. 2014）、あるいは連邦土地開発機構（Federal Land Development Authority: FELDA）地域での組織力（Maznah 2015）や公務員の囲い込み（塩崎 2013）などが、野党（特にPAS）の躍進を妨げた要因として指摘されている。また、官僚機構の統制や制度操作も、BNの強みとされてきたが、今回の選挙でも、選挙管理委員会や結社登録局の中立性の欠如²²、有権者名簿の改ざん等の選挙不正が着目され、選挙の公平性に改めて疑義が呈されている（IDEAS and CPPS 2013; SUARAM 2013; PEMANTAU 2013）。また、新聞やTVなどの主流メディアにおけるバイアス（Anuar 2014; Goemz 2014; Mohd Azizuddin 2014）は、インターネットが普及していない地域や層に対する野党の進出を妨げる一因となっている。

(3) 社会の変化

社会の変化としては、与野党それぞれにとって有利になる変化が存在した。2008年選挙前から盛り上がりを見せる社会運動や非主流派メディアの拡大・浸透は、PRの追い風となった（伊賀 2013）。また、2013年選挙で初めて投票を行う有権者の多くは、野党寄りであったといわれ、野党の躍進に寄与したと考えられる。その一方で、BN後退を背景としてマレー人特権の危機を訴える極右団体が台頭したことは、先述のBNの戦略シフトにとって誘引・後押しとなった。若い有権者のなかでも、マレー系はBNに流れた層も多かったといわれている。

²¹ 公的資源の独占的配分は、政権党が優位を再生産する最も基本的な手段であり（Scheiner 2006; Greene 2007）、BNも例外ではない（Scott 1985; Shamsul 1986; 鳥居 2003; 河野 2009; 鷺田 2014; Washida 2014）。

²² 選挙管理委員会の権限や歴史については、Lim（2005）を参照のこと。

第2節 考察と展望

本節では、既存研究の課題を整理した上で、取り組む上での方向性を論じる。まず、既存研究の全体的な課題として、体系的分析の不足が指摘できる。分析を進める上では、2つのステップ、つまり、得票減少の要因を探り、得票減少が大幅な議席減少につながるメカニズムを明らかにするアプローチが有用だろう。

1. 得票減少要因

まず、第1の課題については、2008年選挙時に、どのような層がいかなる理由でBNから離反したのかを中心に、改めて検討する必要がある。特に、華人の離反要因を探ることが不可欠である²³。2013年での停滞も、2008年選挙での後退の文脈でとらえるべきであるが、2013年の結果は、部分的にBNの選択によって規定されている。

そこで、2013年選挙時における戦略シフト（さらに選挙後の明示的追求）について、補足しておきたい。マレー人の多くはプルカサ等の極右的立場にかならずしもシンパシーを抱いていないにもかかわらず、なぜUMNOは、時代逆行的にも思える民族主義を打ち出すのか。戦略シフトの背景には、苦境のなかでの支持基盤固めや、BN内におけるUMNOのプレゼンスの増大（Kessler 2013）といった背景だけでなく²⁴、イシュー空間上の合理性がはたらいっていると考えられる。すなわち、2次イシュー空間上の覇権政党の戦略を検討したGreene（2008）が、ライカー的攻勢と呼んだ戦略である。

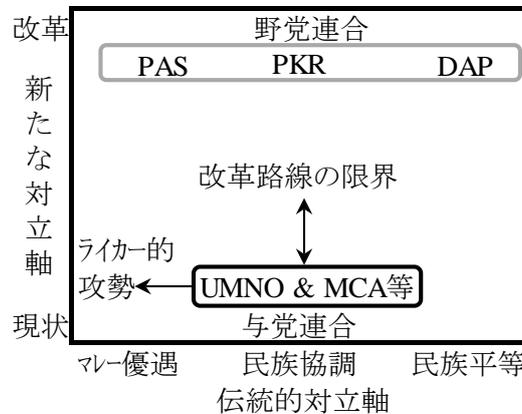
図3は、伝統的イシュー次元（民族的イシュー次元）と新たなイシュー次元（たとえば改革の是非等）の2次元からなる政策空間を示している。前者は、これまでの政治が展開されてきた基本的な政策次元であり、政権党が中道を占めつつ、野党勢力を両極に追いやり、分断して統治することが容易になる²⁵。一方、後者は体制変化を望む声に押されて出現するため、政権党に取っては不利な次元であるとともに、伝統的イシュー次元を横断する野党勢力間に協力の余地を与える。こうした状況下では、政権党は不利になる新たなイシュー次元で戦うよりも、伝統的イシュー次元（民族的イシュー次元）上で（多少の犠牲を覚悟で）中道からあえて急進的立場（この場合マレー人優遇路線）へとシフトすることが合理的な選択となりうる。そうすることで、新たなイシュー次元の顕出性を抑えるとともに、野党（連合）内部やその支持者間に亀裂を生み、揺さぶりをかける効果が生まれる。

²³ 鷲田（2011）で予備的検討を行っている。

²⁴ UMNO組織論理として、党内選挙制度改革に伴う党内ポピュリズムの要請（中村 2015a）が挙げられる。

²⁵ 与野党間の資源の非対称性が顕著な覇権政党下では、政治エリートの多くは覇権政党から立候補してキャリアを積み上げることを志向する。一方、覇権政党が圧倒的に優位ななかで野党を組織化したり、キャリアを賭すのは、イデオロギー的に強い選好を持つ活動家である。こうした組織誘引は、野党をイデオロギー的に非妥協的なものにし、政策次元をまたぐ協力を困難にする。また、選挙戦における支持開拓も、政策志向が近い有権者を中心にアピールするため、政策次元上の移動や横断的な協力をますます困難にする（Greene 2007）。与野党間の資源格差の縮小や、野党内の世代交代に加え、新たなイシュー次元の出現は、野党間関係を動かす契機となる。

図3. 2次元イシュー空間とBNの戦略



2013年選挙後にBNが明確に路線転換したことが奏功したのか、PASがPRから離脱し、PASを割って出た改革志向の少数派がPANとして新たな野党連合PHに加わった。このような再編を経て、野党連合内ではマレー系の議席が減少する一方、DAPのプレゼンスが高まり、野党連合が地方マレー票に食い込むことがより困難になった。次回選挙までにPASがどう動くかが、野党連合の命運を左右する。

2. スウィング効果拡大のメカニズム

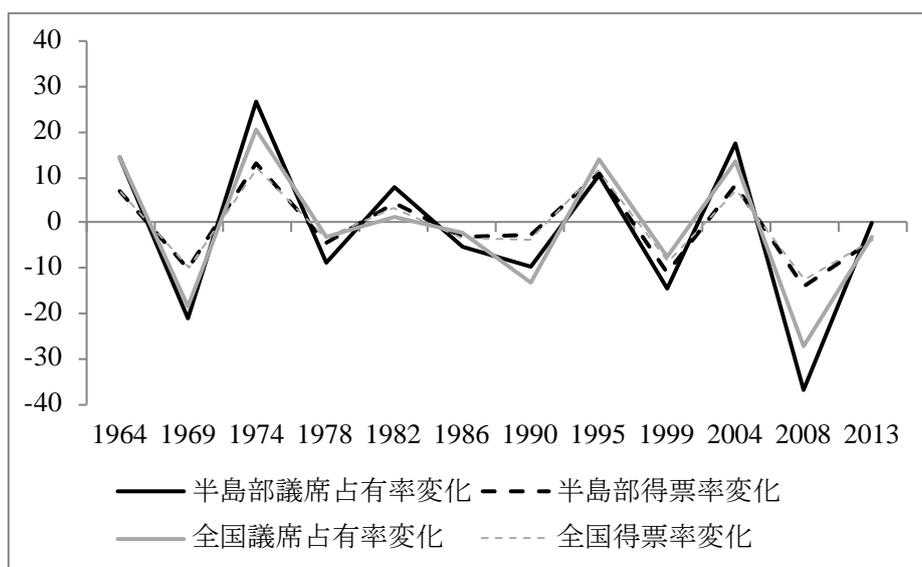
第2の課題は、得票減少が大幅な議席減少につながるメカニズムを明らかにすることである。特に、急激性が問題となる2008年選挙については、重要な課題である。人口規模が多くない華人の離反が、いかに大規模な議席減少につながったのかを理解する上では、単に得票変動を増幅するマクロな小選挙区制の効果だけでなく、既存のBNが民族混合区に依存してきたこと等を踏まえた、ミクロな検討が必要となる。本稿では特に、2002年の区割り変更による意図せざる効果が、大規模な議席減少を引き起こした可能性に着目する。

図4にあるように、2008年選挙での下げ幅は、得票率・議席率ともに過去最大規模であり（それぞれ12%ポイント・27%ポイント減）、特に半島部で顕著である（それぞれ14%ポイント・37%ポイント減）。小選挙区制は得票変動を拡張する傾向があるし、特に得票率が50%付近の弾力性は高くなるため、当然の結果のようにもみえる。しかし、半島部での10.9%ポイントの得票率減少が15%ポイントの議席占有率の下げ幅に収まった1999年選挙との対照性は、マクロな制度的特質だけでは説明できない。得票減が議席減少に与える効果は、離反の主体がどのような層であるかという点と、その層が各選挙区でどれほど選挙結果を左右するかという点に依存する。

しばしば印象論で示唆されてきたように（Lee 2008; 2013; Saravanamuttu et al. 2015）、2008年における議席減少の規模は、2002年の区割り変更の意図せざる効果によって拡大された

と考えられる。2002年の区割りには、1999年選挙結果を受けたBNの戦略が反映されている。すなわち、1999年選挙でBNは、UMNO内対立に端を発した政争によって、大きくマレー票を減らした²⁶。これを受けてBNは、マレー票への過度な依存を減らすために、2002年の区割り変更の際に、票の共有効果が期待できる混合区を増やした（Brown 2005; Ong and Welsh 2005）。

図4. 与党連合の議席占有率と得票率の変化：半島部と全国



注：得票率は無風区除く。1969年選挙は、半島部のみの結果に基づく。

出典：選挙管理委員会より作成。

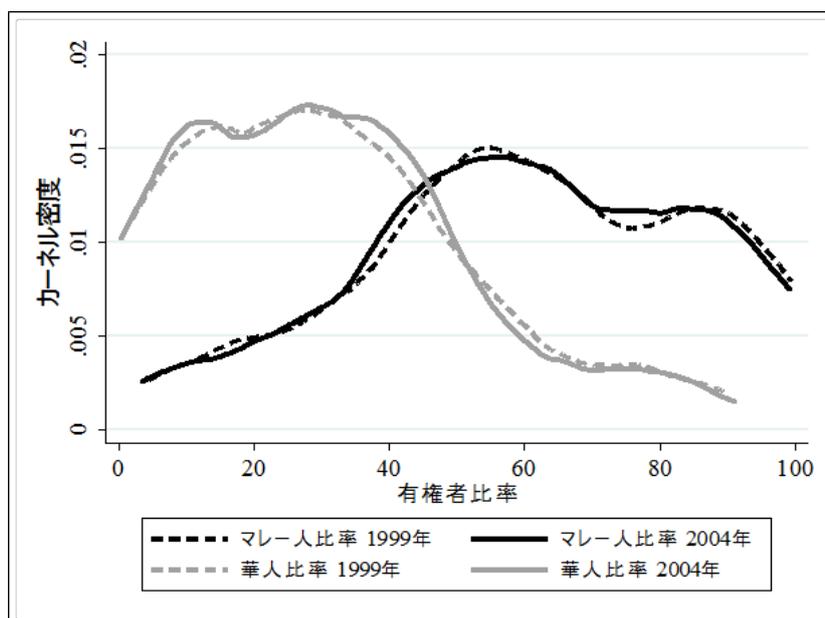
図5は、2002年の区割り変更をまたぐ、1999年と2004年の選挙における、選挙区ごとの民族構成の分布を示している。区割り変更によって、華人比率が50%以上の選挙区を減らす代わりに、30~50%を占める選挙区を増設していることや、マレー人比率が高い選挙区が減った代わりに、30~50%前後の選挙区が増えていることがわかる。

このように、選挙区内の民族混合を進めた結果、華人の支持への依存を高めることとなった。華人の支持を確保していれば、こうした脆弱性は表面化せず、ときに盤石さの錯覚さえ生むが、いったん華人票が離反すると、多くの議席が一気に瓦解することになる。BNは、マレー票の離反に対する脆弱性を減らすつもりが、逆説的に華人離反のスウィング効果を拡大し、2008年での大敗の舞台を自ら用意したといえる²⁷。

²⁶ PKRの実質的代表を務めるアンワルがUMNO時代に、当時のマハティール首相の強権的措置によって職を追われたため、マレー人有権者の反発を招いた。

²⁷ こうした区割り変更の意図せざる効果は、マレーシアに限ったものではなく、平成大合併後の2009年衆院選（斉藤2011）で見られたように、しばしば政党の急激な衰退や政権交代として現れる。

図5. 区割り変更前後の選挙区の民族構成分布



先日、選挙管理委員会は、次の選挙までに区割り変更を行うことを発表した。今回の区割り変更をめぐるステイクは大きく、区割り内容や策定手続きをめぐる展開される攻防は、今後のマレーシア政治の行方を左右することになる。

おわりに

本稿では、覇権政党の典型例といわれた BN の急激な後退と苦戦の特徴を確認するとともに、既存研究の成果と課題について整理した。その上で、得票減少の要因と、得票減少が大幅な議席減少に変換されるメカニズムという二段階での検討の必要性を確認し、予備的考察を行った。具体的には、得票減少要因については、特に 2008 年選挙における華人の認識枠組みの変化の内実を明らかにする必要があること、2013 年における BN の苦戦も 2008 年選挙の延長で捉える必要があるものの、BN の戦略的シフト（ライカー的攻勢）の影響も考慮に入れる必要があること、そして、議席減少メカニズムについては、区割り変更の逆説的効果に着目する必要があることなどを確認した。来年度の最終報告では、体系的検証をもとに BN の後退と苦戦を立体的にとらえたい。

参考文献

日本語文献

- 伊賀司 2008. 「新世代と『オールタナティブ・メディア』: 総選挙の裏側で起こっていた地殻変動」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 89-104.
- 2013. 「2013 年総選挙と社会運動: ブルシはマレーシア社会の何を変えたのか」 山本博之編『二大政党は定着するのか』 66-72.
- 2014. 「総選挙で現状維持、改革は後退ぞみ」『アジア動向年報』 アジア経済研究所 362-385.
- 金子芳樹 2008. 「2008 年マレーシア総選挙における 3 分の 2 議席割れの政治的意味」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 36-44.
- 2013. 「コメント 2」 山本博之編『二大政党は定着するのか』 83-86.
- 河野元子 2009. 「マレーシアにおける開発と地方政治: トレンガヌ州にみる UMNO 体制の生成と展開 1961-2008」 京都大学博士学位論文.
- 斉藤淳 2011. 「地方行財政改革と政権交代」 樋渡展洋・斉藤淳編『政党政治の混迷と政権交代』 東京大学出版会 175-189.
- 塩崎悠輝 2008. 「マレーシア・イスラーム党 (PAS) の新路線と第 12 回マレーシア総選挙」 山本編『「民族の政治」は終わったのか?』 74-80.
- 2013. 「なぜ PAS は『UMNO にとって代わる』ことができなかつたのか? マレーシア・イスラーム党 (PAS) の変遷」 山本博之編『二大政党は定着するのか』 39-43.
- 篠崎香織 2008. 「華人がいま代表者に求めている役割」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 62-73.
- 2013. 「華人の政治意識の変化: 『政治嫌い』、『イスラム嫌い』は解消されたのか」 山本博之編『二大政党は定着するのか』 61-65.
- 鈴木絢女 2008. 「争点と政策空間の変容から BN への投票行動を説明する」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 45-53.
- 2013. 「国民主導の『開発』と国民の『福祉』をめぐる政治から読み解く 2013 年マレーシア総選挙」 山本博之編『二大政党は定着するのか』 18-27.
- 鳥居高 2003. 「マレーシア『国民戦線』体制のメカニズムと変容: 半島部マレーシアを中心に」 村松岐夫・白石隆・恒川恵市編『日本の政治経済とアジア諸国 (上)』 国際日本文化研究センター 39-63.
- 2008. 「BN 体制とは何か」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 13-19.
- 中村正志 2008. 「データでみる第 12 回総選挙結果の特徴と投票行動の変化」 山本博之編『「民族の政治」は終わったのか?』 19-35.
- 2009. 「2008 年のマレーシア: 総選挙で野党が躍進、首相退任へ」『アジア動向年報 2008』

アジア経済研究所 312-340.

- 2011. 「言論統制は政権維持にいかにかに寄与するか：マレーシアにおける競争的権威主義の持続と不安定化のメカニズム」『アジア経済』52 (9): 2-32.
- 2013. 「マレーシア史上もっとも注目された選挙：何が変わったのか？」山本博之編『二大政党は定着するのか』28-34.
- 2015a. 「マレー民族主義と権威主義に回帰するナジブ政権」『アジア研ワールド・トレンド』アジア経済研究所 233: 53-59.
- 2015b. 『パワーシェアリング：多民族国家マレーシアの経験』東京大学出版会.
- 山本博之編 2008. 『「民族の政治」は終わったのか？2008年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア研究会.
- 編 2013. 『二大政党は定着するのか：2013年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア学会.
- 鷲田任邦 2008. 「マレーシアの政党・選挙データ 1955～2008年」山本博之編『「民族の政治」は終わったのか？』171-182.
- 2011. 「マレーシア 2008年総選挙での与党後退と有権者の態度変化」日本マレーシア学会研究大会（於東京外国語大学）.
- 2012. 「『優位政党』の盛衰と公的資源配分：多国間比較分析からみた集票効果の規定要因」日本比較政治学会編『現代民主主義の再検討』ミネルヴァ書房 117-137.
- 2014. 「集票インセンティブ契約としての資源配分政治：マレーシアの開発予算・閣僚ポスト配分」『レヴァイアサン』55: 118-144.
- 2015. 「多民族国家における政党政治と（非）デモクラシー：マレーシア与党連合内政治と閣僚配分」日本比較政治学会編『政党政治とデモクラシーの現在』ミネルヴァ書房 127-153.

英語文献

- Anuar, Mustafa K. 2014. "Election Advertising in the Mainstream Print Media: Politics for Sale during Malaysia's 2013 General Election." *Asia Pacific Media Educator* 24 (1): 77-94.
- Bilveer, Singh. 2009. "Malaysia in 2008: The Elections That Broke the Tiger's Back." *Asian Survey* 49 (1): 156-165.
- Brown, Graham K. 2005. "Playing the (Non)Ethnic Card: The Electoral System and Ethnic Voting Patterns in Malaysia." *Ethnopolitics* 4 (4): 429-445.
- 2008. "Federal and State Elections in Malaysia, March 2008." *Electoral Studies* 27: 740-773.
- Case, William. 2013. "Post-GE13: Any Closer to Ethnic Harmony and Democratic Change?" *The Round Table* 102 (6): 511-519.
- Chin, James. 2013. "Editorial: Chinese Tsunami or Urban Revolt? It is Both Actually." *The Round*

- Table 102 (6): 499-501.
- and Wong Chin Huat. 2009. "Malaysia's Electoral Upheaval." *Journal of Democracy* 20 (3): 71-85.
- Choong Pui Yee. 2013. "Continuing Revolt of the Urban Chinese Voters: The Case of Kepong." *The Round Table* 102 (6): 549-556.
- Fong, Yang L. and Md Sidin Ahmad Ishak. 2014. "Framing Interethnic Conflict in Malaysia: A Comparative Analysis of Newspapers Coverage on the *Keris* Polemics." *Ethnicities* 14 (2): 252-278.
- Gomez, Edmund Terrence. 2014. "Social Media Impact on Malaysia's 13th General Election." *Asia Pacific Media Educator* 24 (1): 95-105.
- Greene, Kenneth F. 2007. *Why Dominant Parties Lose: Mexico's Democratization in Comparative Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2008. "Dominant Party Strategy and Democratization." *American Journal of Political Science* 52 (1): 16-31.
- Hamayotsu, Kikue. 2013. "Towards a More Democratic Regime and Society? The Politics of Faith and Ethnicity in a Transitional Multi-Ethnic Malaysia." *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 2: 61-88.
- Howard, Marc Morjé and Philip G. Roessler. 2006. "Liberalizing Electoral Outcomes in Competitive Authoritarian Regimes." *American Journal of Political Science* 50(2): 365-381.
- Institute for Democracy and Economic Affairs (IDEAS) and Centre for Public Policy Studies (CPPS). 2013. *Was GE13 Free and Fair? An Interim Observation Report on Malaysia's 13th General Election*. IDEAS and CPPS.
- Kessler, Clive. 2013. "GE13: What Happened? And What Now?" *New Mandala*. <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2013/06/12/malysias-ge13-what-happened-what-now-part-1/>
- Khoo Boo Teik and Masashi Nakamura, eds. 2013. *13th General Election in Malaysia: Issues, Outcomes and Implications*. IDE-JETRO Research Project.
- Lee Hock Guan. 2008. "The Ethnic Voting Pattern for Kuala Lumpur and Selangor in 2008." In *March 8: Eclipsing May 13*, edited by Ooi Kee Ming, et al. ISEAS 80-126.
- 2013. "Steadily Amplified Rural Votes Decide Malaysian Elections." *ISEAS Perspective* 34: 1-11.
- 2015. "Mal-apportionment and the Electoral Authoritarian Regime in Malaysia." In *Coalitions in Collision: Malaysia's 13th General Elections*, edited by Johan Saravanamuttu, et al. Malaysia/Singapore: SIRD/ISEAS 63-89.
- Lee Kam Hing and Thock Ker Pong. 2014. "Thirteenth General Elections (GE13): Chinese Votes and Implications on Malaysian Politics." *Kajian Malaysia* 32 (2): 25-53.

- Lim Hong Hai. 2005. "Making the System Work: The Election Commission." In *Elections and Democracy in Malaysia*, edited by Mavis Puthucheary and Norani Othman. Bangi: UKM Press 249-291.
- Lindberg, Staffan, ed. 2009. *Democratization by Elections: A New Mode of Transition*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Liow, Joseph Chinyong. 2012. "Malaysia's March 2008 General Election: Understanding the New Media Factor." *The Pacific Review* 25 (3): 293-315.
- Magaloni, Beatriz. 2006. *Voting for Autocracy: Hegemonic Party Survival and Its Demise in Mexico*. Cambridge: Cambridge University Press.
- and Ruth Kricheli. 2010. "Political Order and One-Party Rule." *Annual Review of Political Science* 13: 123-143.
- Maznah Mohamad. 2015. "Fragmented but Captured: Malay Voters and the FELDA Factor in GE13." In *Coalitions in Collision*, edited by Johan Saravanamuttu, et al. 37-62.
- Mohamed Nawab, ed. 2014. *The 13th Malaysia Elections: Issues, Trends and Future Trajectories*. Singapore: Nanyang Technological University.
- Mohd Azizuddin Mohd Sani. 2014. "Malaysia's 13th General Election: Political Partisanship in the Mainstream Print Media." *Asia Pacific Media Educator* 24 (1): 61-75.
- Moten, Abdul Rashid. 2009. "2008 General Elections in Malaysia: Democracy at Work." *Japanese Journal of Political Science* 10 (1): 21-42.
- 2013. "Secular Dealignment and Party System Transition in Malaysia." *Japanese Journal of Political Science* 14 (4): 463-497.
- Ng, Jason Wei Jian, Gary John Rangel, Santha Vaithilingam, and Subramaniam S. Pillay. 2015a. "The 2013 Malaysian Elections: Ethnic Politics or Urban Wave?" *Journal of East Asian Studies* 15: 167-198.
- , Gary John Rangel, Santha Vaithilingam, and Subramaniam S. Pillay. 2015b. "Rejoinder: The Authors Respond to 'Interpreting Ethnicity and Urbanization in Malaysia's 2013 General Election.'" *Journal of East Asian Studies* 15: 227-241.
- Noor, Farish A. 2013. "The Malaysian General Elections of 2013: The Last Attempt at Secular-inclusive Nation-building?" *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 2: 89-104.
- Oh Ei Sun. 2014. "Malaysian Chinese in a Transitioning Malaysia." In *The 13th Malaysia Elections*, edited by Mohamed Nawab. Singapore: Nanyang Technological University.
- Ong Kian Ming. 2008. "Making Sense of the Political Tsunami." In *Political Tsunami: An End to Hegemony in Malaysia?* edited by Nathaniel Tan and John Lee. Kuala Lumpur: Kini Books. 15-21.
- and Bridget Welsh. 2005. "Electoral Delimitation: A Case Study of Kedah." In *Elections and Democracy in Malaysia*, edited by Mavis Puthucheary and Norani Othman. Bangi: UKM Press

316-345.

- Ooi Kee Beng, Johan Saravanamuttu and Lee Hock Guan, eds. 2008. *March 8: Eclipsing May 13*. Singapore: ISEAS.
- Ostwald, Kai. 2013. "How to Win a Lost Election: Malapportionment and Malaysia's 2013 General Election." *The Round Table* 102 (6): 521-532.
- Pemantau Pilihan Raya Rakyat (PEMANTAU). 2013. *Clean and Fair? An Election Observation Report for GE13*. Petaling Jaya: EMPOER.
- Pepinsky, Thomas B. 2009. "The 2008 Malaysian Elections: An End to Ethnic Politics?" *Journal of East Asian Studies* 9: 87-120.
- . 2015. "Interpreting Ethnicity and Urbanization in Malaysia's 2013 General Election." *Journal of East Asian Studies* 15: 199-226.
- Saravanamuttu, Johan. 2008. "A Tectonic Shift in Malaysian Politics." In *March 8: Eclipsing May 13*, edited by Ooi Kee Ming, et al. ISEAS 33-79.
- . 2015. "Power Sharing Politics and the Electoral Impasse in GE13." In *Coalitions in Collision*, edited by Johan Saravanamuttu, et al. 37-62.
- Scheiner, Ethan. 2006. *Democracy without Competition in Japan: Opposition Failure in a One-Party Dominant State*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Scott, James. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Hampshire: Yale University Press.
- Shamsul, A. B. 1986. *From British to Bumiputera Rule: Local Politics and Rural Development in Peninsular Malaysia*. Singapore: ISEAS.
- Sivamurugan, Pandian. 2010. "Malaysia's 12th General Election: An Analysis." *European Journal of Sociological Science* 14 (4): 508-523.
- Strauch, Judith. 1981. *Chinese Village Politics in the Malaysian State*. Cambridge: Harvard University Press.
- Suara Rakyat Malaysia (SUARAM). 2013. *Malaysia Human Rights Report 2013: Civil & Political Rights*. Petaling Jaya: Suara Inisiatif Sdn Bhd.
- Tan, Nathaniel and John Lee, eds. 2008. *Political Tsunami: An End to Hegemony in Malaysia?* Kuala Lumpur: Kini Books.
- Ufen, Andreas. 2008. "The 2008 Elections in Malaysia: Uncertainties of Electoral Authoritarianism." *Taiwan Journal of Democracy* 4 (1): 155-169.
- . 2009. "The Transformation of Political Party Opposition in Malaysia and Its Implications for the Electoral Authoritarian Regime." *Democratization* 16 (3): 604-627.
- Wahman, Michael. "Offices and Policies: Why Do Oppositional Parties Form Pre-Electoral Coalitions in Competitive Authoritarian Regimes?" *Electoral Studies* 642-657.
- . 2013. "Opposition Coalitions and Democratization by Election." *Government and Opposition*

48 (1): 3-32.

- Washida, Hidekuni. 2014. "Mobilization Incentives under Authoritarian Party Dominance: A Theory of Distributive Politics with Evidence from Malaysia." Ph.D. dissertation, The University of Tokyo.
- Weiss, Meredith L. 2008. "Malaysia's 12th General Election: Causes and Consequences of the Opposition's Surge." *Asia Pacific Bulletin* 12: 1-2.
- . 2013. "Malaysia's General Elections: Same Result, Different Outcome." *Asian Survey* 53 (6): 1135-1158.
- , ed. 2014. *Electoral Dynamics in Malaysia: Findings from the Grassroots*. Malaysia / Singapore: SIRD/ISEAS.
- Welsh, Bridget. 2013. "Malaysia's Elections: A Step Backward." *Journal of Democracy* 24 (4): 137-150.